『地域共創学会誌』，Vol.13，51-65，2024
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Journal of Collaborative Regional Development* Vol. 13, 51-65, 2024

【研究ノート】

竹田春庵正徳度朝鮮通信使応接資料滙編並箚記（二）

石　川　泰　成

要　約

福岡藩の儒者竹田春庵が，1711年に来日した朝鮮通信使の使行員との交流に関する資料を，九州大学図書館・福岡県立図書館に所蔵する竹田文庫を中心に時系列に編纂し注記を付したもの。本号には正徳2年（1712）の復路に関する資料，正徳3年（1713）の竹田春庵と雨森芳洲の往復書簡および享保4年（1719）に享保度朝鮮通信使を迎えるにあたり，竹田春庵ら福岡藩文人たちで藍島での詩文応酬を想定し予行演習した際の資料等を集めた。

Keywords：正徳（辛卯）度朝鮮通信使，竹田春庵，貝原益軒，雨森芳洲，李東郭，朱子学

緒　言

1711年（正徳元年）に朝鮮通信使が来日し，福岡藩では藍島を宿泊地として応対した。その際，藩命により竹田春庵が詩文応酬に当たった。竹田春庵のこの時の応酬に関する資料が竹田文庫（九州大学・福岡県立図書館）に収められており，当時の往路・復路，その後に渉る一連の資料群が残されている。論者は「1711年度朝鮮通信使と福岡藩儒竹田春庵との学術交流―竹田文庫所蔵資料を用いて論ず―」（朝鮮通信使学会『朝鮮通信使研究』第35号，2023年，p.103～133，韓国）において，製述官李礥（号は東郭）との朝鮮儒学，朝鮮陽明学に関して論じた。しかし竹田春庵と奇斗文との医学問答，雨森芳洲との往復書簡等には論及できなかった。そこで本稿は，竹田文庫等の資料を中心に，時系列に並べ，資料自ら当時の状況を語ってもらう方法を採った。なお紙幅の制限もあり，前号と二回に分載した。本号は正徳2年（1712）以降の資料を載せている。『藍島倭韓筆語唱和』が精華とすれば，その下面に多くの枝葉が茂っており，唱和集と本資料滙編を併せ読めば，当時の様子が眼前に彷彿と浮かぼう。各藩が朝鮮通信使を応接するにあたり，各藩の藩儒たちの活動も同様なやり取りがあったと思う。本稿は，井上忠氏，川添昭二氏，高橋昌彦氏，大庭卓也氏の優れた先行研究（注1）に依拠し，それに幾つかの資料を加えて時系列に羅列した。ここに諸賢各位に感謝申し上げる次第です。今次，論者の箚記に採るべき一則でもあれば幸いです。

凡例

一、漢字は常用漢字を用い，和文書簡のカタカナはひらがなに，合字は開き，濁点，句読点を加えるなど通読の便をはかった。

一、虫損など判読し難いものは□で示し，判読に疑問の残るものには（　？）とした。また，

原文の誤記と思われるものも当該文字の後ろに（　？）と補記した。

一、原文を翻刻，収載する際に中略があるときは，「…」で示している。

一、九州大学図書館竹田文庫，福岡県立図書館所蔵を略記し，そのあと史料番号を付した。
例：九大176，県立36

一、今回の章節の数字は『地域共創学会』12号所載「竹田春庵正徳度朝鮮通信使応接資料滙編並箚記（一）」を承けたものとなっている。

2．正徳2年（1712）壬辰

2.1．1月5日　益軒，質問など依頼

（1）九大96-464「益軒書簡」

猶ゝ臘前より早（く？）可遣書候処、老人衰懶且夛事紛擾、賛を考申候に弥ゝ遅ゝ罷成候。　以上

求舩便致啓上候。新正慶賀申納候。御康福年を御迎可被成候。貞之進可為御同事候。御留守御無事之由承候。鄙生小康逢春八十三歳長寿喜幸之事候。彼序文之事弥可被経御心と御煩労存候賛之事数書考候而記遣申候　寿老人賛見出かね候（を？）漸見出申候　太公望之詩賛別に見出不申候。黙坐蟠渓之詩など不宜と存候。

一　韓客淹留候はば手跡御望可被下候。仍料紙を進之申候。大字額など又小字詩文可宜候。

一　朝鮮の事品々御尋可被成候。うぐひす　桜　人参　覆盆子之事　きすご　鯛あか　筆毛などの事共御尋可被成候。酒味など比吾邦如何御座候や。対馬衆可存候。野婦拙書之事大字書置候。其後病不快候而にて今起臥不安候故、難（能？）其事候。若猶数日御淹留韓客も遅ゝに候はば、（其）内得快候節書調進可申候。…

正月五日　　益軒

〔箚記〕井上忠（1959）p.130～131，及び井上忠（1970）p.199～200に翻刻。井上は正徳3年の書簡とするが，正徳2年が良い。春庵はこの時すでに藍島に渡り，益軒が船便で手紙を出していることが分かる。益軒の質問は，2.4.（3）に幾つか反映されている。この時期に竹田春庵に託したものと思われる香耑元永（温庵）が鏡湖・龍湖・泛叟に宛てた詩稿（九大181）が残されている。

2.2．1月13日　益軒，『慎思録』の序文依頼など

（1）県47-370「貝原益軒書簡」

往六日之貴墨素休老より来拝見。如仰新正之慶賀楽申納候。御偏居御年越被成候而大慶之御事

御座候。久風寒弥増候。若舩中御寓居被成はば、可為御艱辛候。西風未已候間、韓客帰来遅滞可有候。…

一　慎思録調申候由、御煩労察申候。序文之事宜様御才覚被成可被下候。

一　韓客に御尋被成可被下候事別紙に草稿を遣申？候。其地に而御浄写成可申候はば御書改被成候而可被下候か。就長き事に而難成事も御座候はば御無用に可被成候。御覧被成不可然事は御除可被成候。夜前灯下に書候而改作もしかと不仕候。若御改書被成候ば見を被成候て文章御改可被成候。　…

一　先日此辺住居の舩頭衆猶唐紙幷八京（景？）詩等託進之候　定而とく届可申候　唐紙は韓客へ御書を可被下由被仰候付進之申候　成申御事に而御座候ば数人に御望可被下候　題字小字可然候　乍御煩労頼申候　陋詩寿老人賛なども書進候。…

正月十三日　　篤信

〔箚記〕井上（1959）p.131～132に翻刻。益軒は『慎思録』の抄写を労い，加えて朝鮮通信使側に序文を請うよう依頼している。前の書簡は和文の質問事項の列挙であったが，今回益軒は，別紙に漢文の質問状を用意したことが分かる。益軒の質問は，2.4.（5）に反映されている。

2.3．1月13日以降～　春庵『慎思録』写し終わる

（1）九大93-445「貝原益軒書簡」

…然而韓客遅滞館待御稽留可為退屈残寒日隆此地世上多病人候。外邪御防御可為御要務候。鄙生今月十三日より患寒咳於て今昼夜苦悩候。…慎思録御写了之由，可為御煩労候。島居万事可為御艱辛察申事に御座候。…

〔箚記〕井上（1959）p.133に翻刻。日付を欠くが，『慎思録』が写し終わったことに感謝し，益軒が13日から寒咳に苦しんでいる内容から，1月13日以降の書簡であることが分かる。なお復路の朝鮮通信使の藍島到着は正徳2年2月1日のことである。

2.4．2月1日以降～20日　春庵，復路で渡せなかった書簡，質問文

（1）『雞林唱和集』巻14竹田春庵後跋（山口県立図書館本，第14冊）

正徳壬辰春韓使北旋、再経過本州、二月朔発長州赤間関、下晡而到泊於本州藍島、其明初二日発藍島到於一州。定直復承邦君之命、自歳前而来藍島。方韓使留旆造賓館欲接見学士及書記。然韓客上館則已向薄暮、倥偬之際漸及夜分、各就枕而偃息。至翌早則得順□、急解纜。故夫能面謁、無復有一篇之唱和。是秋所裁贈東郭書亦不能寄致。外有寄三書記書両通及益軒先生寄東郭問目数件、定直鄙問一通、寄医人書一通幷鄙問数条、並不及贈示。故不記于此。

〔箚記〕2月1日夕方に朝鮮通信使一行が藍島に到着し，そのまま翌朝には出発してしまい，

竹田春庵は通信使と交流できなかった。ここの文面から旧年12月中には藍島に渡っていたことが分かる。復路の交流のため準備した書簡などが竹田文庫に保管されている。それが以下の（2）～（8）である。

（2）県279「呈李学士及鏡湖・龍湖・泛叟諸公案下」

彩旆直過虵（旻？）浜、遠望帆影空傷神。詩盟豈忘秋風夜、文会忽逢和煦春、修礼衣冠還故国、奮才声譽動殊鄰、他時顔色是瓊什、案上長留慎襲珍。

壬辰春　春庵拝具　印　印

〔箚記〕復路に際して挨拶代わりに準備した七言律詩の詩稿と思われる。

（3）九大3365『春庵文稿』6「奉李学士」

奉李学士

吾邑有貝原篤信者、別号益軒、僕所受業也。自幼好学、博渉経史、専嗜濂洛関閩書、践履一従程朱以為規範、年今八十三、致仕在家未嘗一日廃書書、所著亦甚多矣。嘗聞□□来、仰慕□切、然暮齢懶衰不能就見深以為憾。昨者書来、録寄問目数条、欲託僕蒙開諭、益軒邇所著有『慎思録』已脱藁、平安書肆欲刊行焉。僕嘗欲請明公之一語以為序。益軒性謙遜、謂僕云、区々臆説、恐不堪具大方之（煎？）□。然一経観算恭賜雌黄則予幸也。如得其高序、則可謂意外之栄耳。然非所敢也。僕乃携来欲具案下、以塵電嘱対州留節之際、或有間暇、賜瞥筧且録一語、以弁其首、則感戴萬々。問目及『慎思録』並依託芳洲外有鄙問三條、伏冀開諭。鄙意已悉芳洲、其詳則芳洲達之耳。伏祈照察。

壬辰仲春

〔箚記〕益軒の『慎思録』出版に当たり李東郭に序文を依頼した内容。貝原益軒にとっては，朱子学について長年の思索を巡らした書であっただけに，朱子学を正統とする朝鮮の儒学者から益軒の考えに対する批評を序文に期待したであろうが，その機会を得なかったことは益軒にとって大変残念なことであったろう。

（4）九大竹田文庫176「鄙問」

鄙問

一　燕山松庭朱世傑著『算学啓蒙』三巻、嘗聞朱世傑是貴邦人也、果然耶。燕山松庭並是貴邦地名耶。抑松庭是世傑之別号耶。朱世傑所立天元之正負術、発古人所未発可謂妙々。吾邦四十年前、京師人横川心庵者始読啓蒙通其術。吾州人星野郭庭者相継発明作『啓蒙註解』以行于世。貴邦今用其術否。…①

一　貴邦用中朝之暦日耶。抑別有官暦而施行耶。嘗聞中華今所用名「時憲暦」。貴邦亦用其法否。…②

一　在東都吾邦之舞楽耶。我朝之学自中華伝来者多矣。並是漢唐古楽而今用之一種有高麗楽者

数十曲、伝云自貴邦来者也。如延喜楽・地久楽・納蘇利等是也。貴邦今猶在否。〇貴邦楽器有琴耶。与中華之製同耶。…③

右三件蒙開諭惟幸。　　春庵具

〔箚記〕九大竹田文庫3365『春庵文稿』六「奉李学士」にも収載。九大竹田文庫176は「鄙問」部分にあたり提出用に準備した原本かそれに近い草稿。鄙問の質問は，『藍島記』8月6日にあった内容である。

①第一の質問は『算学啓蒙』の著者朱世傑の出身が朝鮮国か質問。この本が朝鮮の世宗（1419～1450）によって復刻され，日本には朝鮮経由で1600年前後に伝えられた。そのためか朱世傑が朝鮮国の人と思い質問したのだろう。日本での刊行は，万治元年（1658）が最初とされる。星野郭庭は，『新編算学啓蒙註解』を寛文12（1672）年及び，貞享3年（1987）に出版し，福岡藩に招聘され和算を教授していた。春庵も算学に関心を寄せ，彼の文集には，和算に関する文章が残されている。

②暦法について，①の算学とも密接に関連する学問で，春庵は星野実宣，益軒ほか仲間たちと天文観測サークルを作り研究していた。『春庵文稿』に天文学関連著書に与えた序文を収める。

③は，新井白石が今次燕楽として雅楽を上演することを春庵が草稿作成時（正徳元年8月6日）すでに情報を得ていたかもしれないが，竹田春庵は仲間たちと古楽，雅楽を合奏するほど音楽に関心があり，ゆえに朝鮮の琴と中国の琴との異同を質問したものか。

（5）九大竹田文庫179　「貴国之書～」

一、貴国之書、吾邦自昔年伝来者多矣。如『東国通鑑』『朱子書節要』『続蒙求』『三綱行実』『自省録』『撃蒙要訣』等吾邦平安城書房既所刊行也。如『高麗史』『李退渓集』『李晦斎集』『慵斎叢話』『家語孝註』『感実録』『修攘通孜』『童蒙先習』『海東諸国記』『東医宝鑑』等諸書亦皆貴国先賢所述作而来于本邦也久矣。倶可為好書、就中『東国通鑑』可謂経済之要典也。其中金富軾・権近諸先生之議論英発、義理正確最可嘉嘆。金富軾先生作『三国史』如高麗史所嘗観也、如新羅・百済二史所未観。貴国有正史可謂具備也。鄭圃隠先生始倡程朱之学、以還李退渓・李晦斎等諸賢相継勃興焉。可謂貴国道学有其人也。近世亦継承正学而倡導者在耶。其最秀逸之人希聞其姓名号。…①

一、嘗聞貴国有獣似鹿、方言称乃呂、其形状巨細、其情態・性味亦若何、希詳示。…②

一、貴邦有虎、本邦所無。倘山中往々有之、便恐樵夫暨取材者被噛、画無種類。然則深山窮谷之中極所希有耶。豹亦有之耶。…③

一、本邦有奇獣謂眚、如狸。夜入人家災牛馬。牛馬一触之、則死。雖猛犬不能近、唯里人藂衆鳴鍾鼓狩出而殺之。如『震沢長語』『皇明通紀』所言。不知貴国亦有此物乎。…④

一、自貴邦所来五味子、真是有五味与中夏所産異矣。是可為本草所称遼五味子也。不知貴国之

中処々産之耶。…⑤

一、本邦有小鳥古来称鶯。然非真鶯、比黄鳥其形甚小其色緑褐、自立春発声至于秋而止其鳴。円滑高亮可愛玩。雖非真鶯比之、鶯声却勝。好事者及児輩籠飼之。貴国亦有之耶。其名称如何希指示。…⑥

一、貴国之習俗与吾邦相同者多。如神祇勲号、守庚申、換甲厄年、五月五日石戦之属是也。貴国之民俗今亦有此事乎。如石戦者本邦近世有禁而止矣。…⑦

一、潜確類書載朝鮮国三歳一試、有進士諸科。今尚如此乎。苟然則貴国之取士、不依于任子而啻取有才学乎。抑世臣多而間取進士而補其不足乎。…⑧

一、貴国在中華之北、其風気寒冽、故不産茶茗、与橘柑且竹亦鮮矣。然耶。…⑨

一、本邦自古昔称神国所祭祀之神祠多而不可枚記。其所製作極壮麗者甚衆矣。不知貴邦唯有創業君王及賢之廟堂焉。而神祠之多不如本邦耶。…⑩

一、吾筑州之西有長崎港西蕃商舶之所来集彼地。海賈嘗謂我、「昔遍遊諸蕃而為賈諸州之稲米及醞酒、無及日本之美好者。諸蕃之穀及酒皆為淡薄。」貴邦如何。誠如彼海賈所言耶。疑是彼海賈之言張皇於我邦云爾耶。未可信。…⑪

一、中華学術、近世不依宗儒諸先生之説而別立異論者多矣。如郝景山・虞（呉）廷翰・王嗣槐輩是也。不知貴国諸儒中復有為如此説者耶。…⑫

〔箚記〕九大竹田文庫3365『春庵文稿』六「奉李学士」にも収載。この質問12箇条は，益軒等から託された質問。この（5）は，字体など整え最終段階に近い草稿。質問をおおまかに分類すると，(a) 儒学，科挙に関するもの。①，⑧，⑫，(b) 動植物に関するもの。②，③，④，⑤，⑥，⑨，(c) 風習，民俗など。⑦，⑨，⑩，⑪となろう。貝原益軒の学問の特徴である本草学，博物学的傾向がよく現れた質問。各条の註解はいずれ別稿に譲るとして，(b) の④「眚」について解説すると，益軒の『大和本草』巻16「黒眚」（益軒会編纂『益軒全集』巻之六，1911，p.416）に記載があり，中国の『震沢長語』を引用したのち，日本の周防国や筑紫国におり，牛馬に害をなし，賢い上に素早いのでなかなか捕えることはできない旨述べ，また『筑前国続風土記』巻29（名著出版，1973，p.668）にも，眚は，狸に似て，鳴り物を恐れ，人々を多く集め山狩りし，鐘太鼓を打ち鳴らし，出てきたら打ち殺すと述べる。益軒は眚を中国，日本に実在する獣とみなし，朝鮮にもいるのか質問し，眚の生息範囲を確かめようとしたもの。益軒の実証的精神が発揮された質問である。

(a) ⑫については，明代儒者の反朱子学的要素を持つものに対する朝鮮側の見解を問うたもの。郝景山（名は楚望，1558～1639），春庵が郝京山とするのは景山の誤り，虞廷翰は呉廷翰の誤り。益軒が『大疑録』巻之下（荒木（1970）p.44）で，郝景山，王嗣槐（1620～?）を引用し，『太極図説』を周濂渓の作であるか疑問を投げかけている。このことは，「無極而太

極」が老子や仏教の語とみなし，理の「無極」性を否定することとなり，ひいては理気一体の立場に立ち，理は気の理として理解されることになる（荒木（1970）p.474参照）。郝京山の学問について，荒木見悟は「楚望は，主体的根源の確立はめざすものの，良知説ほどの自由は認めず，さればとて朱子学の格物窮理説にも同調しない…」（「郝楚望の立場」『中国哲学論集』20集，九州大学中国哲学研究会，1994，p.3）ものであり，益軒，春庵の朱子学内部で修正を試みる思想的立場に近いものがある。呉廷翰については，益軒は『慎思録』でも引用し，影響を受けているとされ，荒木見悟（1970）の「…その他益軒との深い因縁を取沙汰されるものに吉斎漫録の著者呉廷翰がある。…朱子学寄りの理気一体論であることは，たしかに益軒の好みに合うというべきであろう」（p.490）との指摘が参考となる。

当時，益軒は『慎思録』を完成させ『大疑録』にも着手した頃で，いわば自己の思想的立場が確立した時期であった。益軒の立場に近い郝景山，王嗣槐の評価を尋ね，同時に，朝鮮朱子学の現在的状況を理解し，また自説への検証材料にしようとした質問である。

（6）九大177「呈良医奇公案下」

医者人之司命也。古人所謂其功与良相将者、誠有以哉。況保身奉親者、豈可不知医乎。僕自幼嗜読方書、毎有間暇則巻舒、無釈然其理奥妙、未能窺一端也。夫素難之為経為医家之宗、劉・張・朱・李、猶吾儒有周・張・程・朱、誠是医学之模範不可不読其書也。至元・明以来諸家方書、則汗漫浩瀚、得失亦相半焉、不可不旁求互用也。但恨自非具折衷之眼、則不能無望洋之歎。近世張景岳之明於蔵象、闡軒岐之秘、李東璧之精於本草、発神農之蘊、二書可謂大補於後世也。然猶恐不免有偏僻之論駁雑之患。明初薛立斎祖述東垣独歩一時。爾後明医之学多似不出其範囲。至近世則李仲（中？）梓可謂大家也。所著数部来於吾邦、其書立論之確、施治之精、似可以為法矣。不知於尊意為如何耶。夫古今方書其簡帙重大者、則宜備考索而不便日用。如其要約者吾国俗以『虞氏正伝』『呉氏方考』『龔氏回春』等数部、『李挺入門』等所好尚也。不知貴邦学医者、於近世方書、何書為要務、於近世諸医、以何人精工耶。診脈之法、従何人之説為拠耶。寸口部位拠脈訣耶。近世華医往々依「循脈要精微論」而立法。然其説亦各異矣。不知以何説為正耶　貴邦名医有幾人耶。未審聞其姓名且所著有何書耶。如『東医宝鑑』『医林摂要』等則嘗来於吾邦、但極希有而未得之見、深以為憾矣。想其他亦宜多好書。伏希前問委曲開諭、荷萬々統祈慈□

壬辰仲春

〔箚記〕3365『春庵文稿』6にも収載。竹田春庵は，少年の頃より儒学と共に医学も修め，『頤生輯要』を編纂し，自ら按語を付している。ゆえに奇斗文への質問状で展開する医学史の知識も医家のものと比べ遜色がない。春庵の薛立斎（1488～1588）と李中梓（1588～1655）とに対する評価が高いことが分かる。冒頭の「医は人の司命である。古の人は医者の功績は優れた宰

相，武将と並ぶ……まして自分が健康で親に孝行を尽くすものは医学について知らないわけにゆかない。」と述べ，中国・朝鮮のように医者を技術者として扱い，科挙出身の士人より低い社会的地位に位置付けることがなく，また儒教の最高徳目である「孝」の実践のために医学が必要という点に春庵独自の観点が表れている。

（7）九大3365『春庵文稿』6「又奉問良医奇公」

又奉問良医奇公

一、吾邦孕婦以帯縛肌上欲令胎不肥大且無上衝之患、以為通法。於中華方書未見。此事只於『奚嚢便方』見之。然此対症之一術而非通治之法。不知貴邦亦有孕婦以帯縛肚腹之事耶。

一、吾邦患痘之児方収圧□□以米泔湯澡浴、間日一浴至三五次、則□□痂亦是為通。麻疹亦然。於中華方書□□□出痘者外未見用湯治。貴邦有痘麻疹用□□之法否。

一、吾邦民俗称痘有神、有患痘児則祭之。嘗見貴邦人所著鬼神論弁其惑。貴邦今尚有祭痘神事耶。痘果有神耶。

一、久吾聶尚恒所著『活幼心法』論痘麻疹尤確治、発明古人所未発。吾邦児科依其方甚得験者多矣。聶尚恒忌預用解痘毒之薬、其弁論尤明白。於尊意如何。

一、吾邦有一種病名舌疽者、初発舌上如粟粒、経年堅硬、最後糜爛、腫痛舌焦黒、乃作心火鬱灼所致而治多用芩連等寒剤或以通聖散、加減而用之。然多難愈舌□□或一片脱落而死。又有断骨疽生於歯断□□□略似舌疽、歴□腫痛瘡口難破、腐臭久後□□脱落而死。亦少有愈者矣。二疾之名於□□□（中？華？）方書未之見焉。抑中華之書亦載之耶。貴邦亦有如此疾而用何剤而愈之耶

一、中華方書於導痰之剤往々用荊瀝或竹瀝、各随其症用之。本邦医人不知荊瀝、一用竹瀝。貴邦有荊否。其形状如何。□於本邦経過之間見所謂荊者耶否。

一、牛黄自貴邦来者為最上而極希有矣。如其自中華来者頗多矣。不知中華商舶所販者真耶否。且貴邦多牛黄耶。其有黄之牛与衆牛異耶。取之之法為何。

〔箚記〕前の書簡が医学の基本書についての質問であったのに対し，この書簡では，個別の病気や薬剤の疑問，質問を並べている。このうち1箇条が妊婦の腹帯，3箇条が天然痘に関する質問で，産婦人科，小児科を専攻とした春庵の関心が強く現れている。第5条の「舌疽」については，大庭卓也（2009）に論及がある。

（8）九大3365『春庵文稿』6，「奉鏡湖龍湖両公案下」

呈鏡湖・龍湖両公　案下

往歳僕不自揣、以鄙問于冒李学士。当時諄々蒙提誨且承貴邦聖学之隆昌、誠足以興頑愚。僕幸為籍甚、今再陳区々蛙見呈李学士、以祈是正応南書記之辱問、述吾邦諸儒所以為学以録奉焉。伏希両公亦賜覧観。僕於両公去秋蒙青顧瀝荷汪度、況得瓊琚之盛、貺什襲以為家珍、豈不云幸甚哉。夫騒壇之交、翰墨之遊、誠是風流之雅、致人世之至楽而非復酒色宴楽之比矣。雖然於学

問上実地則未必為有大益也。幸遇君子儒、速会蒙密而独止於花月閑言語者良可惜也。唯冀足下発揮心得之緒余、託毛楮二先生有所以教。僕則何幸如之、忽聞星槎開驅将在明早、天吝良縁、不容再会、豈任抦悒所願得一語教示以為佗後顔面耳。誦之有所顧愧則於進修之道、亦豈小補之云哉。万々海涵。

壬辰仲春

〔箚記〕この資料とほぼ同文のものに九大178「呈鏡湖・龍湖両公案下」がある。ただ九大178には署名・捺印があるので復路で提出予定だった原本と思われる。『春庵文稿』ものは後年，収載に当たり推敲を加えたもので，少し異同がある。ここには『春庵文稿』のものを掲げた。

2.5．2月8日～9日　藍島～福岡帰着

（1）『朝鮮人帰国之記録』（福岡地方史研究会『福岡藩朝鮮通信使記録』7，p.162）

一、…郡正太夫、二月八日福岡帰着、其外之面々も同晩、翌朝にかけ、段々罷戻候、…

〔箚記〕信使船が2月2日に出発したのち，福岡藩関係者は福岡城下に帰る準備をしていたが向い風が強くこの日まで藍島に滞在を強いられた。

2.6．2月22日　春庵，唱和集の原稿を督促される

（1）九大54-232「益軒書簡」

貝原益軒

弥御無事可有御座候。京都茨木多左ヱ門状下候。韓客京師江戸筆譚唱和於京都刊行既成候。此地へ有之唱和早く上を候はば可然由申越候。貴朋御存被成候書林刊行可仕由申越候と見へ申候。早ゝ遣候而可然候。

一　旧冬御写させ被下候慎思録浄写に而為刊行上を候はば可然候はんが為商量申進候。…

二月廿二日

〔箚記〕井上忠（1959）p.134に翻刻あり。京都の書肆柳枝軒から，藍島での唱和集の提出の督促を受けている。春庵としては復路の分も含め唱和集を提出するつもりであったか。竹田春庵，神屋松堂，鉄相の唱和・筆談は，『雞林唱和集』巻14に収録し，版元の瀬尾維賢の按語に「按筑前唱酬当載諸州前編対長二州之間。而今在此者因刻向成而其稿方来也。故唱和簡牘多略之，纔記数篇耳。」と言い，竹田春庵が提出した唱和集が出版間際に到着したことが分かる。この唱和集の刊記に「正徳壬辰夏五月」とあるから，この間，僅か二,三か月の間に原稿を届け，板木に刻し，印行されたわけで，そのスピードといい，唱和集を細大漏らさず収載しようという姿勢とともに，当時の日本の文人たちに通信使との唱和集がいかに人気だったかが窺える。柳枝軒茨木多左ヱ門は貝原益軒の著書を多く出版しており，その縁故から『雞林唱和集』

の版元瀬尾源兵衛が柳枝軒を通じ，藍島での唱和集の提出を督促させたのであろう。

2.7．10月 春庵，雨森芳洲に質問状を作成

（1）九大3365『春庵文稿』六「贈雨森芳洲書」

一別光儀飛鴻冥々雲水渺茫瞻望不及、伏惟賢履百福、至祝往歳始挹□采、渥蒙汪度、且頼先容数接殊客、雅会連宵可謂千載奇遇也。今茲之春幸得再会欲尋旧盟、倥偬分袂万々為憾、爾後欲裁寸楮以候震艮且奉謝厚意、適縁寡君命、僕以事鞅掌而不遑及他疎慢欠礼、伏希休咎、恭惟足下奉君命伴待異賓、経桟航時更裘艱辛其多少矣。伏以使軺（所？）至文人墨客于謁於異賓者絡繹如雲、関闠成市、応接引儐之繁、賢労其亦多少矣。況其適其情達其意、正其礼検、其文自非胸抱八斗之材、則何其得合其職堪其任乎。固可健羨耳。且夫自京畿東都以至諸州、足下所接遇皆是一時之奇才英士、而其与殊方之俊選相会於騒壇吟場之間、談詩論文者親見之、相倶作翰墨之遊、無有所遺。正是人間難得之楽、而其所以蕩胸洗襟。豈啻呑雲夢八九之云耶。一時諸賢亦莫不知足下之才之美、而声誉之馨香施及於殊鄰良可賀也。曽聞足下昔時受業於順庵先生之門、其所以成就材器、真有淵源矣。夫先生之学天下無争先、児童走卒亦所知也。雖然如僕尤加其敬者也。本州貝原益軒当昔遊学京師、与順庵先生相交有旧甚敬信。其為人先生亦遇益軒也厚矣。益軒者僕所師也。嘗語及当世人物、則必以先生為第一。先生初在京師遊尺五堂之門、僕先君亦在同門。当時先生年已長焉、学亦優焉。先君尤敬之、而兄事焉。爾後先生所自得、不止博識強記、而学術之純粋、徳業之邵高、所謂青于藍者也。先生在世、僕不及交一面、然先生乃吾父師所尊崇、故僕也傾注葵心已旧矣。聞足下受業於其門、則僕之所以傾慕、足下其情不泛常、不亦宜乎。但恨天限以東西、地隔以滄溟、不得相与講習討論於一床之間、旦夕受切磋薫陶之益、徒為明河之望耳。僕本京師之産、幼而孤、落魄無聊。但縁有一二親戚在焉。二歳而来本州、蒙邦君之哀恤得免寒餓、及漸長依君命、為益軒門人、従事於文房之間。僕性庸劣、学不加進、犬馬加歯、今也値四十五十而無聞之人、悵然自嘆也。已往歳蒙寡君之命、到藍島侍賓館、幸観殊方之国華。僕平生只好読周程張朱之遺書、未習韓柳李杜之文藻、無由得楓零一句、然以不得已、故具検癡符於韓客之前、幸蒙足下之引容得諸賢之瓊報。況連夜之良晤青眼頻加其楽於心、不忘今猶発于夢寐之間、当時僕妄書鄙問于冒李学士。学士不辞煩労見恵答諭詳悉。亦是頼足下良媒之深恵感荷豈極。当時玩読東郭答書、慨嘆殊鄰儒風之盛、嘉尚其学術之粋正、然鄙意猶有二三可疑。幸遇韓泊繋纜於本州慈島、再録鄙見欲因便寄贈、則其明已開、不及達致、姑詵北帰更期再会之良覿、別有鄙問数条閉幷欲寄三書記暨良医各一通。益軒亦書疑目十数則託僕欲寄東郭、且有益軒所著『慎思録』十余巻、欲諸製述官之一語以為之序、並携到藍島欲奉煩足下、又松堂縁適有恙不得再往以奉足下啓一通、及寄李学士排律百五十韻付托之僕、且同邑韻士十余輩、各附僕以文辞欲具之韓客。然皆不得遂宿志為恨尤深。高門秀才春洲・桂洲両兄平安否。去秋傾蓋

於藍島深蒙眷愛。今春到藍島則、天吝良縁不容再見、甚違素志、如霞沼公則来往之間、不得一見、徒有芳名轟耳而已。万々為歉辱、自足下所伝達鄙意。惟幸春洲兄去歳通姓名、如桂洲兄則倥偬之際、但聞別号、未詳其姓名、得見告示惟華、僕向所裁欲贈李学士書略述鄙疑、然両邦之交憚其不恭不尽所思、且如其則不及達之投反古堆耳。今又別述其意、以具在僕之於足下、固無所避忌、故悉吐露情実、以俟是正、勿以粗率見咎幸甚。僕窃観韓国人物、多是老実質素、其人可親。但礼節之煩細、頗有不備而失於鄙野者、恐是由習気所囿耳。且以其与中華壌地相接、故文事苟完備矣。如製述官・三記室之文雄偉快活尤可珍愛。且其学術之粋専崇程朱不雑異論、亦恐是由国俗貞実有守也。昔年朝鮮成翠虚従信使経過本州対於益軒之問云、韓国纘承道統之伝者甚多矣。夫関道統者、雖中華甚希有而外国何其人之多如此也、僕甚怪之。恐是張皇之辞耳。今観東郭答語、則知翠虚所語纘承道統之伝者、只是言継其学脈所従祀孔廟者非謂周孔思孟若人之謂也。然亦是足観学脈連綿有其人也。已吾州人嘗依官事往藍島、観韓人礼節疎開大不同於吾邦、而或誹笑之者亦多矣。僕則謂不然、若夫礼節疎簡而不備者、自是俗習未変也。其称礼儀之邦者不在此也。窃按礼之大者、名分服章之尊卑等級与夫冠昏喪祭之儀文而已。是其大綱也。素聞韓人於礼之大綱極其謹厳、則小徳之出入時有之、亦宜在所可恕焉。如中朝今変胡服、則可□嘆耳。昔程子至禅房、方飯見其趨進揖遜之盛、歎曰三代威儀尽在是矣、先賢所嘆如此。今夫変夷者、雖華亦夷也。其変華者、雖夷亦華也。東郭所謂一変至道者、可謂非虚語也。今以本邦人比彼、則頗有豪貴之風、人材亦多怜利敏捷。僕嘗数遇長崎人経過吾州、聞為南北京・福州・漳州等語、其音軽重重清濁絶不同。甚則至其語不相通、如韓人之語、則其重濁又下於中夏北鄙之声音、而聞其為吾邦之語者彷彿於関東僻地之語。観其書画則亦有一定之風。与華人之書画較不同。如吾邦人弄書画模倣中華之法者、則其所写出筆書、甚相似而如無所弁別、京畿人之声音軽清明亮又与南京人之声音相同。曽聞南京人為吾邦之語者甚似京語。吾邦人多敏材而少厚重、故学術亦間有好異者。中華明季諸儒多好異学、誹議程朱輩、其弊亦相同。如韓人則其質多厚重、不変其所守、専信従程朱之言者、亦恐係其国風也歟。不知足下意為如何。東郭答僕書云、鄭圃隠倡明吾道、毫髪尽折其所註解経伝、一与朱夫子訓釈之文暗契懸合。圃隠使本邦寓本州太宰府事蹟已存口碑、且於『東国通鑑』見其為東方理学之祖、而其説与胡炳文『四書通』脗合。如圃隠本集則僕未得之見。松下西峯嘗取其説於『異称日本伝』、則知此書已流伝於京師、向承足下嘗観其集。其書有幾巻耶。東郭所謂解経之語出集中耶。別有所著之書而伝之耶。幸示及焉。凡韓人所著書刊行於京師坊間者頗多矣。然其不遍布者、不得輙見之。想貴州自朝鮮航来者宜居多矣。或貴州有□不許妄□行耶。或在坊間交易者可得購求耶。蒙告示及惟幸。東郭答僕、以学問当求於心数語、其言深切良用感服。今世往々以講章為道学全不在心上做功夫之弊。僕亦嘗所患也。東郭又答僕問明季諸儒経解云、未聞我国諸先生以此等諸書置之於丌上。雖汗牛充棟何所用哉。其見可謂高矣。然僕窃謂明儒所著経翼、雖未必尽（是？）、而輔翼朱註、発明経義、亦不為不多、所

不可全廃也。若夫所謂一部大学在胸中者、則雖朱註亦宜無所用、此固非初学之事矣。夫堯之伝舜也、允執厥中一言而足焉。及舜授禹則加之、以人心道心之三言、至若周孔思孟則其言漸多矣。然当時只読四子六経已足焉。後世之人為見義理不通暁。故其解之之言、愈多而不厭、至今学者則雖朱註、亦於文理不能通暢、故不得之階梯、則多失入門路頭。苟倣明敏之才全廃之、則所謂学歩邯鄲者也。只其精粗得失択之在其人耳。僕向挙方正学違朱子不乖道之語問東郭、其所答諭良為明白、方正非刺朱子者、語為確。僕亦未嘗以正学之言為非。但至東郭所謂正学之論議、最正大非可論擬、於以秦檜為宋忠臣之瓊山之語、則未能無疑。正学忠誠節義固可尊、亦是出其学之得正矣。如其文章亦可以為一代之雄也。已然丘文荘之学極純粋尊崇程朱、不雑異論、其所著『朱子学的』『家礼儀節』『世史正綱』『大学衍義補』等書、有功於斯道、亦可以為偉矣。就中如『衍義補』則経済之要典、可謂人君之亀鑑矣。文荘論秦檜、既言其罪通乎天。而於岳飛之死、則謂非矯詔於和□之議、則称于宋有再造之功、其於檜似有所回護、其論固可怪也。然亦是千慮之一失、恐不足害其為人耳。東郭所議恐似為己甚者矣。薛敬軒（以？）尊許魯斎爲朱子以後一人、然後儒往々議之、而東郭之書未言及之、不知魯斎出処其可否。於足下之意為若何。至正学違朱子不乖道之語、則僕窃有取焉。蓋正学従大学古本不用格致補伝、故発此言、而虚斎・次崖等並依循之、馮氏『求是編』尤潤飾之。然其不用補伝、則吾窃不取之也。李退渓別紙所論極確、近世孫詒仲所著『四書緒言』亦反覆弁論為明晰矣。然至違朱子不乖道語、則其論公平、未必不是也。況已自道違朱子云云、朱子所取也。非背朱子亦可見。僕窃謂其於程朱之説、或偶同而其学術相異者有之、如陽明是也。蓋陽明尊明道、取朱子其説相合者頗多矣。然其学則偏曲而已。此其説間同程朱而其道相悖者也。其言或不同而其道相同者有之、如朱子於程子是也。朱子解易解論語与程子之説相異者甚多矣。然程朱学脈一轍、初無容其議者、其於張子亦然。皆是其言雖異其道相同者也。故学術之異同在其大本処、而非在一二言句之上異同。且夫天下之義理不是一人之私言、自非大聖之遺訓、則雖程朱之説、亦豈得免時有一二之過差耶。故僕窃謂明季諸儒妄誹議程朱者固非也。阿諛而曲従程朱者亦未必為是也。正学所謂違朱子而不乖道者、亦恐此之謂也歟。僕具東郭鄙問中言近儒多所発明者、亦窃言此耳。非敢左朱子従近儒也。足下以為如何。伏願発其所蘊（賜？）指教幸甚。区々鄙言不能已剰穴至此、恐嘱不堪屏（瑩？）、維時寒威漸至随時、珍重万惟□海。

壬辰十月日　竹田定直具

〔箚記〕竹田春庵が，往路での再質問や復路での質問ができなかったため，朝鮮儒学に詳しい雨森芳洲に質問をすることで，李東郭との議論の疑問点を解こうとした内容。竹田春庵の学問に対する真摯な姿勢が窺える。中国・朝鮮の儒学に関する質問を要約すれば，①鄭圃隠の学問についての質問。②李東郭との往復書簡の中に，朝鮮では明儒の書を評価しないのは本当かどうか？③方孝孺が「朱子と相違しても道（真理）とは相違しない」としている言葉についての

春庵の考えを披露。③元・明儒の評価（許魯斎，薛敬軒，丘文荘），および王陽明の評価となろう。竹田春庵の思想を直截的に表明したものとしても貴重な資料である。

3．正徳3年（1713）癸巳

3.1．1月　春庵，雨森芳洲に書簡を送る

（1）九大3365『春庵文稿』文6「贈芳洲」

律回太簇、玉暦頒陽、遥惟台候、動止百福、与時倶新、可以爲鯫生無它、又累犬齢往歳執謁於藍島、時在初春。当昔忽々揖別、爾後歳華如流、復遇陽春、風景依〔人＋希〕光儀相違、感時更加思慕。嗚呼人生如萍水、可勝嘆哉。去年孟冬謹裁鄙書欲以奉案下、縁不得的便未及寄致、尚存篋笥裏、方今再修前書、依頼貴邸留守竹森氏託鴻便以達左右。鄙意已悉前書、今不復贅、伏望因便恭賜回諭、当是融和之時、倍加珍愛、□祈慈謦。癸巳正月

〔箚記〕ここの「昨年10月に私は手紙を準備しあなたのお手元にお届けしようと思いましたが，縁故が得られず，まだ文箱の底に残していた」のが上記2.7.（1）の書簡。

（2）九大3365『春庵文稿』文6「贈芳洲」

往歳方韓使帰旆也松堂偶有宿痾未癒、到藍島而陪賓館。乃裁啓文一通、託僕以奉案下、別有排律一篇、欲以寄贈李学士。僕並携到藍島。然匆々不及達致。今適得存篋笥□不忍棄捐、別封以具案下、一賜覧観松堂□□焉。松堂今得無恙、縁拘多事不能奉□□□耳。伏希炤亮。癸巳正月

〔箚記〕この書簡は松堂の詩を雨森芳洲に送ることを知らせたもの。

3.2．4月12日　雨森芳洲，春庵に返事を送る

（1）県54「雨森芳洲尺牘」

獲承上年十月及今年正月二書憑審

起居冲裕不勝慰、傃而辞翰之贍、麗義理之深奥、固非庸劣如僕者所能窺。嗚呼足下之於文也、何其雄且偉至此哉。僕自幼齢知読聖人之書、曽聞海西有貝原先生者、仰慕已久矣。頃在貴境幸承謦咳於詩酒之間、快覩揮毫之際、有一段超然絶倫之気、尋聞其為先生之高第、驩然心融不啻、如獲拱璧今見所示書意、愈知学問淵源所自来者、逾尋常万々而所以驩然心融者、豈独当日之比而已哉。可敬可敬。僕与李東郭往返数千里路、朝討夕論、情逾骨肉、深知其為寛厚長者。其所謂彼国師儒多承道統之伝者、決非有於張皇而虚詡之也。蓋尊其君則曰聖主、称其臣則曰賢大夫、推其学則曰承道統之伝。此乃人情相愛相敬之常、辞爾於東郭也、奚恠焉。丘文荘之学非不富也、非不博也。然至於華夷之弁忠奸之際、則為仁人君子者、固当謹厳其言而使天下後世明知善悪是非所在、昭然如日星之麗天而所以云々者。安知其非志尚見識、有未能尽出于純粋者耶。果如文荘之説、則澹菴固当謫而王倫未必斬也而可也。夫以武穆之忠而一旦斃於姦諛之手、凡慷慨激烈

之士、誰不為之搤腕瞋目、痛首而腐心。文荘卓然、称一代儒宗而乃為此回護之言、固不可以為千慮一失而軽恕之、其所以蒙識於千古者亦宜也。足下以為如何。朝鮮之為国也、僻居東極之隅、言語風気与中国不同。然其俗尚文好学、冠昏葬祭、一従『文公家礼』。且称藩奉職不廃事大之義。此漢人所以称為有礼之邦也。雖然其人豈皆雍容揖遜之俗哉。弟所嘆者我国昇平已久、礼教未行、半髡雕題而居喪無服、同宗相婚而斎僧為祭所講者、唯止于曲礼未節之間、而於人倫之大綱則蔑、爾有所不知、有愧於朝鮮者其亦多矣。来書所諭彼風俗筆法幷論学異同、皆僕之所欲言而未能者、一旦得之於高明之言、其快何可喩哉。東郭所言註解一款、僕亦不能無疑。学問之道以広求博覧而精択為務。故古之君子於其進学之路也、雖芻蕘之言、猶且有所不棄而択之以精、何況名儒之註脚乎。倘以其言之出於季世、一切却不之省、窮理之道恐亦不如是也。松堂公所賜一書、文采華縟珠璣粲目、今世何嘗一見此等文字乎。一百五十排韻措辞命意、蒼然有古色。但使東郭未及一覧而去、良為可惜。第其書中有僕嘗為訳之語、近見大坂所刊『両東唱和録』亦云、訳者雨森氏、真令人愧赧無地矣。僕嘗以為人之在一世也、苟無四方之遊、則略解四方之語、亦足以償男児桑蓬之宿志。故在長崎則唐話、在釜山則韓語、而信使行聘之際、技癢難熬、卒爾出口亦不過、是一時遊戯爾。夫以知命将近之人而無片善可称、反蒙象胥之名、不亦為辱太甚乎。松堂公所称固知其出于錯愛、然毋煩再説為望。呵々朝鮮書冊固無鬻売之事、坊間所有不過、是壬辰賚来之物至今尚存耳。鄭圃隠所著僕亦未嘗多見、実不知其所学深浅、果如何。爾許魯斎出処、談何容易謹当細思、僕以告訃末价滞留釜山、正在旅泊無聊之中、獲奉手書、喜躍異常、不独陳檄之愈頭風也。第冗務偏埤、旧学荒廃、勉強奉答、言不成文、幸勿哂焉。弊徒春洲・桂洲並無恙、幸蒙存問、足感厚意。桂洲者号和瀧正蔵、噫僕之与足下鯨海為阻、不能従容譚討以吐平、昔之蘊唯臨楮悵然而已。幸察粛此。不備

癸巳四月十二日　　雨森東頓首　印　印

〔箚記〕川添昭二（1984）p.352～353に翻刻あり。雨森芳洲は，この時釜山に滞在。芳洲は明儒や清儒の注釈書でも良い物は参考にすべきだと春庵に賛同。また，丘文荘に対する雨森芳洲の評価が記されている。神屋松堂の文に，芳洲を通訳として扱った表現があったため，芳洲は儒者として自ら任じていただけに強い憤慨を吐露していることが読み取れる。

4．享保4年（1719）己亥

4.1．7月4日　享保度通信使との詩会のため予行練習を行う

（1）九大3369『春庵文稿』9「擬韓人唱和序」

〔箚記〕享保4年（1719）7月4日，まもなく藍島に朝鮮通信使を迎えるにあたり，古野元軌（鏡山また梅峰と号す）に正徳度の詩会を模擬体験させる。福岡藩儒たちの入念な事前準備を示す資料。この後，8月2日以降，古野梅峰は朝鮮通信使と詩や書簡の交流を行い，唱和集『藍

島唱酬』を編む（秋月郷土館所蔵）。石川泰成（2004）『九州産業大學国際文化学部紀要』第28号に翻刻あり。

後 跋

茲に諸先輩方の発掘した資料及びその他竹田文庫などから正徳度朝鮮通信使と竹田春庵に関する資料を集め，時系列に編纂し応接の全体を俯瞰した。我が管見がゆえに遺漏した資料もあるかと思います。諸賢のご示教を切にお願い申し上げます。竹田春庵と李東郭や雨森芳洲との往復書簡などは長文で，質疑の応答も，方孝儒，許魯斎，丘瓊山，王陽明らの人物評価や朱子学に関する深いやり取りがなされており，特に元明の儒家に対する朝鮮朱子学の評価と日本朱子学の評価の違いなど興味深いものがありました。これらの人物評価をめぐっては，日本朱子学内部においても竹田春庵，雨森芳洲ら木下順庵の門流の評価と山崎闇斎一門の評価も異なり，別途さらなる詳細な考察が必要だと感じました。今回の資料滙編が，朝鮮通信使研究，日韓思想史研究，日本朱子学研究に一素材を提供するものと考えています。（了）

参考文献

井上忠（1959）『益軒資料　五　書簡集（下）』（九州史料刊行会編，昭和34年7月）
荒木見悟・井上忠（1970）『貝原益軒　室鳩巣　日本思想大系34』（岩波書店，1970年）
川添昭二（1984）・福岡古文書を読む会『新訂黒田家譜附録第七巻（中）』（「書簡」，文献出版，昭和59年3月，p.263～p.353）
川添昭二（1984）・福岡古文書を読む会『新訂黒田家譜附録第七巻（下）』（「藍島記」，文献出版，昭和59年3月，p.345～p367）
高橋昌彦（2007）「7　韓使唱酬」（財団法人西日本文化協会編纂『福岡県史　通史編　福岡藩　文化（下）』，福岡県発行，平成6年3月，p.130～139）
高橋昌彦（2007）「朝鮮通信使唱和集目録稿（一）」（『福岡大学研究部論集A　人文科学編』6巻8号，福岡大学，2007年3月，p.1～p.19）
高橋昌彦（2010）「朝鮮通信使唱和集目録稿（二）」（『福岡大学研究部論集A　人文科学編』9巻１号，福岡大学，2009年5月，p.1～p.20）
大庭卓也（2002）「福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使」（九州大学国語国文学会『語文研究』第93号，平成14年，p.14～24）
大庭卓也（2006）「西日本に残される朝鮮通信使自筆資料」（国立国文学研究資料館『国文学研究資料館紀要』第32号，文学研究篇，平成18年2月，p.97～p.124）
大庭卓也（2009）「竹田春庵資料の新検討」（川平敏文，大庭卓也『福岡藩儒竹田春庵宛書簡集』，雅俗の会，平成21年5月，p.120～p.136）
＊本研究はJSPS科研費JP22K00048の助成を受けた成果の一部である。